

ドミナント・ストーリーの抽出とオルタナティブ・ストーリーの生成 ——「奇跡」をテーマにした映画づくりワークショップの実践を事例として——

早稲田大学 社会科学総合学院
非常勤講師 沼田真一

1 目的

本報告の目的は、映画づくりワークショップ（以下、WS）の実践によって、参加者からどのようなドミナント・ストーリーを抽出し、また、オルタナティブ・ストーリーの生成したのかを明らかにすることである。映画づくり WS の実践は、現象学的な計画論の文脈で、東日本大震災時の被災者の自己物語と地域の物語の「書き換え」を促した可能性が論じられている。本稿では、2018 年までに実施した映画づくり WS において、「奇跡」というテーマを映画づくりの条件として設定した実践を採り上げる。映画づくり WS の参加者は、「奇跡」により解決したい自身の葛藤、所属団体の葛藤、地域の葛藤などを物語に描き出す。つまり、「奇跡」は、「問題の外在化」を促すテーマとして設定されている。ここで浮かび上がる葛藤を「ドミナント・ストーリー」とし、この解決を「ドミナント・ストーリー」とする。これら、「ドミナント・ストーリー」と「オルタナティブ・ストーリー」は、一般的なアンケート調査やヒアリング調査では、回答としてえられにくい小中学生の心理的内面を映し出している。

2 方法

まず、前提として、映画づくり WS は、アクションリサーチの研究手法を採用し、ナラティブ・アプローチとしての研究姿勢を重視している。それらを踏まえたうえで、「奇跡」というテーマ設定を付与して撮影し、完成した作品群の映像分析を行う。映画づくり WS は、フィクションであることを明確にした「奇跡」による問題解決の物語となるため、参加者の悩みや葛藤のナラティブが誘発される。そこで①「ドミナントストーリー」としてどのような課題、葛藤を抽出したのか。②「オルタナティブストーリー」としてどのような解決を生成したのか。③そもそもどのような「奇跡」を描いたのかの3つを整理する。これら整理から、参加者である小中学生が、普段、自発的に語ろうとせず、潜在化している問題意識や社会認識を明らかにする。

3 結果

映像分析の結果、①「ドミナント・ストーリー」としては、「喪失」「孤独」「自己否定」などが描かれ、②「オルタナティブ・ストーリー」としては、「変身」「復活」「再会」「自己実現」などが描かれた。③「奇跡」としては「異能者との邂逅」「時空間移動」などが描かれた。映画づくり WS は、新たに 2018 年 8 月の実施を予定しているため、この結果も含めた最新の結果を報告したい。

4 結論

以上、映画づくり WS の実践から、限定的ではあるが、小中学生の潜在的な①「ドミナント・ストーリー」、②「オルタナティブ・ストーリー」、③「奇跡」の具体的な内容が明らかになった。これらの物語群からは、子どもたちのもつ人間関係の悩み、過去の後悔、将来への不安を読み解くことができる。また、東日本大震災に関連しては、フィクションでありながら、極めてリアルな現状が結果として映し出されている。参加者による作品鑑賞は「私は、私が創り、私が映る、私の物語を観る」という自己物語を意識化する構造をもち、研究から派生したいくつかの筆者の気づきや発見、意図せぬ結果についても言及したい。